

祝魂歌

隅田聖美

栗色の髪をかきあげてきみが笑う
上品なコーラルの口紅が きみの薄い唇を彩っている
乳白色の頬に影を落とすしわが きみの生きてきた日々を語るのだけど
でも、きみの肌は なんと柔らかそうなんだろう
悲しみって優しい匂いがするものね、やっとな、最近気がついたの
擦りガラスのように柔らかな光をたたえたきみの瞳が
ほくの背後のほくの影を眺めている
たくさんの悲しみに出会いました
楽しかったことや、輝かしい思い出は
遠い彼方の風景のように わたしの記憶という実感がないのだけれど
悲しみだけはしっかりと そのころの景色や、音とか匂いとか
色や温度まで鮮明に蘇ってくるの
たくさんの悲しみに出会いました
息が出来なくなるほど泣いたことも
うつむいたまま顔をあげることもできなくなったことも
誰かと笑いあったことや、声をあげてはしゃいだことや
とてもとても大切な人の幸せに立ち会ったことが 輝いていたはずの大切な思い出が
空々しいほど薄っぺらなフィルムのようなのに
あれほど苦しんで未来を思うことさえできなかった日々が
わたしの中で 鮮やかな光に包まれてまざまざとよみがえるの
きつと 悲しみがわたしを、人間をつくるのね
うまくは言えないのだけれど
わたしが生きてきたときが
蘇ってきた悲しみが
いつの間にか柔らかに輝いて わたしの輪郭を、はっきりと形作っていることに気が
ついたので
面白いわ わたしの本当の人生が 今、始まったような気がするの
きみの唇から滑り出た言葉が世界の真相を顕わしている

祝魂歌

ほくも、きみの言うとおりでと思うのだ
ただぼくは 君ほどだくさんの悲しみを持ち合わせていないから
だから、一つ深呼吸をして 歌おう きみとぼくの歌を

もしもこの世界できみが たった一人の女なら

世界一優しくして 世界一冷たい女だ

もしもこの世界に きみとぼくしか存在しないなら

きみは世界一美しくして 世界一醜い女だ

だけどこの世は動いている 世界は回っている

だからきみは 世界一優しくして 世界一美しいひとだ

きみは悲しみの正体を暴いた

きみの悲しみが優しくぼくを包み込み

生も死も、世界と分かたれて逝くことさえ福音なのだと囁きかけるように

そう、ぼくに囁くように

きみの優しい瞳がぼくを見てくれている

そしてぼくに レモンより酸っぱいキスを

0点回帰

隅田聖美

すっかり早くなつた初夏の夜明けは暴力的
茉莉花ジャスミンの香りに みしみしと包み込まれ

もう正気ではいられなさそうだ

行く春を惜しんでも 花びらの一つさえ残っていないのに

ただ春の宵の 切なくて懐かしい あの暗い色が好きなだけ

強すぎる香りが 君の名前でないとすれば

この焦燥に説明がつかない

君はもう、私の名前など忘れてらうけれど

音をなくした君の名前がよみがえる

なぜか電話番号だけを覚えているのだけれど

その持ち主が君でなくなっていると思っっている

もし万一 君が持ち主であっても架けられないのだろう

もし君が電話に出てしまったら いったい君を何と呼んでしまふだろう

…そう思うと

いまだに私は電話を架けられないでいる

なんだって今頃 君の夢なんか見たんだろう

春の惰眠は幸せすぎて いつまでも目覚めたくないのに

君の肌の匂いが思い起こされて 眠れなくなった午前4時半

私の隣で眠っていた君の 寝息が聞こえた気がした

あれからもう何十年と経つのに、私は また君の夢を見る

こんなにも深く刻まれてしまっていた 君の面影

一生逃れられない、そんな恋をしてしまったのは…

幸せなのか、それとも不幸なのか…?

暑かったね あんなに貪って

舌の根に残る甘い香りは 過ぎた夏の残り香だろう

カラカラになるほど 求めあったあの時間は

銀河のまっただ中で狂ったように回るクウエイサー

やせた腰を抱きしめ ひたすら乞うていた 君を

ああ、そうか ひたすら乞う、だから、この思いを恋と呼ぶのか

時の経つのも忘れて 求めあった あの

夜明けの色が忘れられない

このまま、時よ 止まれと叫びたくなる

水底のような青い プルキンエ

きつと、あの時間を覚えているのは 私ただひとり

あの季節を知っているのは 私、ただひとり

傷つけあった日々でさえ

泣き、叫んだことさえ なんだってこんなに愛おしいんだろう

夢に現れる君は あの頃のまま、若いままで

手を伸ばせば触れられる そんな距離にいて

あの、貪るように求めあった日々を思い 辛く、切なくなるのだけれど

君はもう、私のことなど覚えていない、そんな気がして

君の姿を眺めたまま 声をかけられずにいる

夢の中だとわかっているのに声をかけられずにいる

もし本当に君が、再び私の前に現れたら

もう一度だけ、あの、熱い抱擁の先の プルキンエを見てみたい

目覚める前から囚われて

起きても覚めない夢の中にいるのは

強すぎる茉莉花の香りのせいなのだろうか

それとも 音をなくした君の名前を 思い出したせいなのか

何十年も経つのに いまだに囚われている

そんな恋をしてしまった私は

幸せなのだろうか？

それとも不幸なのだろうか？